

シリーズ 私の一冊の本

看護学部 白尾久美子 先生

山田 規畝子著 『壊れた脳生存する知』

閲覧室 1 階 916/Y 19 講談社 出版

本書は、脳出血に脳梗塞を併発した医師である筆者が、高次脳機能障害を生じ、様々な後遺症に苦しみながらも、自らの病気について書きとめたいいわゆる闘病記である。しかし一般的に目にする闘病記とは一種異なった闘病記であるといえる。

筆者が高次脳機能障害という脳に障害をもっていることである。脳出血や脳梗塞により脳に損傷を受けた人々の障害とは、手や足の麻痺というのが一般的に知られていると思われる。しかし高次脳機能障害は、言語・思考・記憶・行為・学習・注意などに障害が生じ、脳の損傷の部位によっては、手足に麻痺が生じなくても障害が発生する場合があります、他者に非常に理解されにくい障害であるという特徴をもっている。私自身も学生の実習等で、高次脳機能障害の患者と接した経験をもつが、障害そのものを把握することの困難さを実感している。

本書で筆者は、正常な機能が障害されつつも、体験している様々な障害をカラリと書き記している。例えば、目が見たものを脳が正しく理解できないために、和式のトイレとタイル張りの床が区別できずに、便器の中に足を突っ込んでしまったこと。ベッドシートと床の区別がつかなかったために、手を着く場所として床を選択し転んでしまったこと。階段の前に立つと、階段がアコーディオンの蛇腹のように、横走る直線の棒の繰り返しにしか見えないため、下りる階段なのか、上る階段なのかを悩むこと。

このように、筆者が体験した多くの日常の障害は、具体的にそして客観的に描写されている。しかしながら本書は、脳の障害について単に書き連ねた闘病記ではない。脳の損傷により、働きが障害されただけでなく、心の障害についても率直に語られている。「何やってんだろう、私。そう。高次脳機能障害の本当のつらさがここにある。おかしい自分がわかるからつらい。知能の低下はひどくないので、自分の失敗がわかる。(中略)いっこうにしゃんとしてくれない頭にイライラする。度重なるミスに、われながらあきれわ、へこむわ、まったく自分が自分でいやになる。」(第3章より抜粋)「おかしい自分がわかるからつらい。」というこの1文は、今までまったく気づくことができなかった、高次脳機能障害をもった人々の心の叫びを聞いたように感じた。

本書は、高次脳機能障害を知っている専門化のための本ではない。高次脳機能障害をまったく知らない人々でも、この本を通して、障害をもちながら生活する人々の真実の声を聞く機会になることを期待している。